労協連だより

古村 伸宏

協同労働運動30年余の歴史上、最も重い意味を持った総会･総代会が終わった。久々の地方・鹿児島での開催ということもあり、多くの参加と物産展の賑わいに彩られ、あっという間の３日間だった。歴史上最も重い意味とは､｢社会を変える｣主体として、地域のど真ん中でそれを果たす努力を尽くす、という意思統一であったこと。ただ、これまでの総会･総代会でも、こうした「覚悟」や「構え」が常に示されてきた。今回の総会・総代会の重みは、「社会を変える」ために、「何を」「どのように(どんな方法やあり方で)」進めるのか、を明示し確信し合ったからである。

「何を」とは、昨夏以降合言葉にしてきた｢FEC自給コミュニティの創造」と「総合福祉拠点づくり」であり、これを現実化するための「仕事おこし」である。このテーマ自身も、震災後の新たな路線であるが、より本質的な重みは、これをどう進めるか、を巡る新しい段階への挑戦である。それは、組合員だけの仕事おこしから、利用者・地域・市民を全面的で本格的に巻き込んだ仕事おこしであり、それは「社会連帯経営」という理念に通ずる。この１年、障がいを持つ子どもたちの放課後の居場所づくりが、全国で立ち上がった。その全てが、「保護者主体」「保護者とともに」立ち上がっている。資金もそれを表す集まり方(集め方)である。FECと福祉総合拠点はこの段階を更に進め、全ての市民・地域にとって必要不可欠な仕事おこし運動の創造を意味する。同時にそれは、地域を市民が経営することにつながるものであり、貫かれるべき理念は、「社会のために(社会をよくし、みんなが幸せになるために)連帯・協同する」ということだ。3.11の経験は、決して遠くの手が届かないものではない。もっと足元の日常にこそ生かすべき経験である。総代会のまとめでは、「FEC自給コミュニティの創造と総合福祉拠点づくり」「社会連帯経営の創造」のために、３つの基礎活動の重視を呼びかけた。それは､｢出会うこと」「話し合うこと」「結び合うこと」である。全組合員経営を掲げた労働者協同組合としての歩みは、同じ呼びかけから始まった。協同労働の力の源泉は人と人の徹底した関係づくりと、その中で育つ一人ひとりの志と他者への共感力である。その源泉を、内なる組合員間から、地域全体で育む段階へと突き進む決意こそが、本総会・総代会の重みである。しかもその先にある世界が、FECという言葉に彩られ具体化しつつある中で、決意は確信へと迫っている。

2012年も間もなく折り返し。国際協同組合年を飾る、全国協同集会の準備も佳境に入ってきた。先の実行委員会では、分科会テーマとタイトル付けを巡り、やや乱暴な(準備してきた事務局を悩ませるような)議論となったが、思いのほか「面白い議論だった」という声が多かったようだ。ここでも本音で話し合うことの重みが示され、もっともっと出会い・知り合う努力を迫られているようだ。